

第 18 回(2009. 7. 1 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「7 月は七夕」

7 月 7 日は七夕(たなばた)である。この日を昔は「七夕の節句(しちせきのせっく)」といい、五節句の一つで、旧暦の 7 月の行事だった。旧暦 7 月は現在の暦では 8 月ごろだから、8 月 7 日に行ったりする地方もある。たとえば、お盆の行事が多くの方で 7 月ではなく 8 月に行われるのもそういった理由である。現代では、3 月 3 日の「桃の節句」や 5 月 5 日の「端午の節句」などのように、五節句の行事は旧暦でなく新暦によって行われるのが一般的になってきた。

「七夕の節句」は、奈良時代から宮中の行事として行われていた。本来は女の子が書道や裁縫、手芸が上達することを願う行事であったといわれているが、それが中国から牽牛と織女伝説が入ってきたことによって、平安時代には星祭りの意味合いが強くなった。現在では、本来の書道や裁縫、手芸が上達することを願う行事という意味合いが薄れて、七夕飾りやお祭りの雰囲気だけが強調されて、仙台の七夕祭りに代表されるように大きなお祭りになっている。

この行事は、江戸時代になって五節句の一つと定められたことにより、広く一般に行われるようになったが、この日は邪気を払うために和歌や願い事を短冊に書き、切り紙細工などとともに笹竹に結びつけて飾ることが行われ、素麺を食べる風習があった。そもそも、中国で織女星が昇った頃に供物を捧げて、書道や裁縫、手芸が上達することを願った乞巧奠(きこうでん)の行事からだ。そこに、織女星と牽牛星の悲しい物語が加わった。織女星と牽牛星の悲しい物語とは、天帝の娘の織女と牛飼いの牽牛があまりにも仲良くして仕事もしなくなったので、天の川を挟んで年に一度しか会うことができないようにさせたという有名な伝説だが、実は日本にも古くから先祖の霊を祀るために機を織り、織りあがった布を先祖の霊に捧げる行事があった。これらの物語が結びついて七夕の行事になったという説もある。

この機織りの行事は、お盆の前に行う行事だともいわれている。「ねぶた祭」や「ねぶた祭」など各地に残る「ねむた流し」は、本来は 7 月 7 日に行われ、機織りの行事と同様に汚れを払い清めて先祖をお迎えする行事なのだそうである。七夕の節句は、もともとは「しちせきのせっく」といったが、「たなばた」と呼ぶようになったのは、この機を織る女性を「棚機つ女(たなばたつめ)」と呼んだところから七夕(たなばた)となったといわれている。「七夕」にしる「ねむた流し」にしる、こういった故事来歴は忘れ去られて、祭りの派手さだけが伝承されていく。

織女星は、「こと座」のベガ、牽牛星は「わし座」のアルタイルで、ともに一等星で輝いている。この二つの星座の間には「はくちょう座」があって橋の役割を果たしているように見えるという。そうはいつでも、星を線で見なくても琴や鷲あるいは白鳥には見えない。こういった名前を付けた古代西洋人は想像力がたくましかったのか、あるいはつい最近まではもっとたくさんの星があって、そのように見えていたのかもしれない。

最初に星座に名前が付けられたのは、古代バビロニア(紀元前 1800 年ごろ)においてだといわれているが、どうももっと古いらしい。メソポタミア文明(数千年前に興った世界最初の文明)以前にさかのぼるともいわれている。古代エジプトの遺跡でも星座と思われる図が発見されている。古代エジプトから古代ギリシャに伝えられて、神話として人々に知られてきたともいわれているが、古代ギリシャでは紀元前 9 世紀の「ホメロスの二大叙情詩」である『イリアス』、『オデッセイ』に登場しているのが最も古い記録だといわれている。その後、数々の星座が勝手につけられて収拾がつかなくなり、1928 年国際天文学連合が現在の 88 星座に統一した。これらはラテン語で命名されたが、

日本では1944年に日本学術会議が、その訳名を統一して現在の日本語名になっている。

平成10年(1998)、奈良県明日香村のキトラ古墳から、玄室(棺を納めた部屋)の天井に描かれている天体図が発見された。この古墳は7世紀末から8世紀ごろにかけて造られたものと思われるが、これが現在では日本最古の天体図で、東アジアでも最古の図だともいわれている。

ところで、古墳といえば高松塚古墳や將軍塚古墳などいろいろな名前の古墳が各地にあるが、キトラ古墳とは変わった名前であり、しかもカタカナも珍しい。あるとき、最初に盗掘した墓泥棒が古墳に穴を開けたところ、亀(玄武)と虎(白虎)の絵を見てびっくりして逃げ帰ったということが村人に伝わって、そこからキトラ(亀虎)古墳と名付けたという話を聞いた。しかし、知人の考古学者によると、古墳の周りの地名が字「北浦」だから、それが変じてキトラになったのだというが、考古学は古い事柄を調べて古代を探求する夢のある学問だ。地名よりも墓泥棒の亀と虎の話の方がずっと夢のある話ではないか。

そもそも七夕飾りは、川に流して禊ぎをするものだが、今は川には流せない。河川の汚染など環境破壊を恐れるからだが、それよりも街の中を流れる川で、流せるほど水量がある川は今ではほとんどない。その理由は、上流でせき止めて人間が飲んでしまったり、お尻を洗ったりしてしまうからだ。雲竹斎が住んでいる千葉県の上水道は利根川から取水している。この利根川は群馬県に源を発し、茨城、埼玉を通して千葉県の銚子から太平洋に流れる日本で二番目に長い川だが、一部は東京にも流れ込む。だから、沿線各地で取水して排泄し希釈消毒して再び利根川に流す。したがって、千葉県民は他県の人のお糞尿を飲んでいるとまでいう人もいる。早く宝くじでも当てて山紫水明の山中に引っ越したいものだと思いますが、未だに実現できない雲竹斎は悲しい。

七夕飾りは川に流せなくなったが、だからといって簡単に燃やすこともできなくなってきた。ダイオキシンの問題や地球温暖化の問題も拍車をかけている。いずれ火葬も禁止されて、人間も死んだら動物園の猛獣の餌にするようになるかもしれない。情緒も何もなくなってきた。

本来は楽しくロマンチックな七夕からこのような話になってしまった。收拾がつかなくなったから、今回はここまで。